

## 『荒地』小論

—— Phlebas はなぜフェニキア人なのか？ ——

森 田 由 香

Phlebas in T. S. Eliot's *The Waste Land* : Phoenician, or Jewish ?

MORITA Yorika

『荒地』のフレバスはなぜフェニキア人なのだろうか？ アルファベットの発明者だから、漁夫王伝説の中央人物アドーニスがフェニキアで信仰されていたから、アエネイスがフェニキア人デイドと恋をしたから、聖アウグスチヌスが訪れたカルタゴにちなんで、とこれまでさまざまな理由が挙げられてきた。<sup>1</sup> しかし、中でもアントニー・ジュリアスのいう、フェニキア人はユダヤ人だからという理由は興味深い。<sup>2</sup> というのも、フレバスとユダヤ人ブライシュタインとの関係の謎をとくヒントになると思われるからである。長身で美貌の若者であるフェニキア人フレバスと、“Dirge”に登場する醜い金の亡者であるユダヤ人ブライシュタインはある詩行を介してつながっている。なぜなのだろうか。

その前に、フェニキア人がユダヤ人だというのは根拠のあることなのかを見ておく必要があるだろう。日本人読者にとってフェニキアは文化的にも時代的にもにはるかに遠く、ユダヤ人とは別だと考えるのが普通だ。フェニキア研究の重鎮であるモスカーティは、フェニキア人の出自について、原カナン人であったことは確かだろうが、ここ25年でかなり研究がすすんだにもかかわらず依然謎のままであるとしている。<sup>3</sup> その謎の民族が、19世紀後半、アーリア人種とセム人種が「発明」され、この二分法が「信仰」のように「ヨーロッパ全体に行き渡っていた」時代にあって、<sup>4</sup> セム系＝ユダヤ系と連想されたとしてもとても不思議はない。エドワード・サイードの「アラブ人とは馬に乗ったユダヤ人だった」という皮肉をこめた指摘をみても、<sup>5</sup> セム人種とみなされた人々はユダヤ人と同じ枠にくくられていったことがわかる。

『荒地』と同年に出版された『世界小史』でH. G. ウェルズは「フェニキア人は突如として歴史から姿を消す」が「かつてフェニキア人が足を踏み入れたところにはどこにでもユダヤ人の共同体を見出される」と、両者を同一視、ないしは関連付けしている。<sup>6</sup> また、現

代西欧人の古代史観にひそむイデオロギー性と差別意識を暴き出して各方面に多大な影響を与えた著書『黒いアテナ』でマーティン・バーナルは、「フェニキア人は文化的に非常にユダヤ人に近いと考えられてきたし、事実そのとおりだ」と指摘している。<sup>7</sup>

イギリスにはもう1つフェニキア人とユダヤ人がむすびつけられた事情がある。錫(すず)である。古代の重要な金属である青銅の製造には銅と錫が必要だった。コンウォール地方はその貴重な錫を産出したため、フェニキア人がはるばる海を越えてやって来ていたと一般に思われている。<sup>8</sup> ヘロドトスがカッシテリデス(「錫の島」の意)と呼んだ場所がコンウォールだという説である。<sup>9</sup> 考古学的には証明されていないもののイギリスでは広く受け入れられているようで、コナン・ドイルもホームズに次のように言わせている:「古代コンウォール語は・・・大部分がフェニキアの錫商人に由来するのだろう。」<sup>10</sup>

この民間伝承と、古来コンウォールの錫鉱山はユダヤ人が経営していたとされていたことを考え合わせてみよう。コンウォールの古代の錫鉱炉の跡をさす“Jews' House”ということばや、そこでみつかる錫製のランプのことをさす“Jews tin”ということばが19世紀までは使われていたようである。<sup>11</sup> 時代的にはかなり隔りがあるにもかかわらず、錫鉱山の経営者に結果的にユダヤ人が多かったため、フェニキア人がコンウォールにやって来たという伝承と重なって、両者は同一視されたのかもしれない。

『荒地』第4章“Death by Water”のフランス語版ともいえる“Dans le Restaurant”でエリオットは、フレバスを「錫の荷」(“la cergeaison d'étain”)を扱う商人として描いている。<sup>12</sup> 海をロマンティックに考える現代人にとって船乗りと商人は結びつきにくいかもしれないが、古代では島々を行き来する船乗りは、冒険や漁業のためというよりも、商取引のために海を渡っており、船乗りイコール商人と捕らえられていた。<sup>13</sup>

さらにいえば、コンウォールに錫を求めてやってきたとされているのは確かにフェニキア人だが、カナン近くのフェニキア諸都市からきたのではない。フェニキア人が北アフリカに建設した植民市カルタゴからである。紀元前5世紀にカルタゴのヒルミコがコンウォールまできたのかもしれないと歴史家たちは推測する。<sup>14</sup> たしかにホメロスをはじめヘロドトスなどギリシャ・ローマ側からのフェニキア商人の評判はよくない部分もある。<sup>15</sup> しかし、カルタゴのそれとは比べ物にならない。ポエニ戦争を推進したローマのカトーの“Delenda est Carthago”(「カルタゴ滅すべし」)<sup>16</sup>に始まって、ギリシャ・ローマ側からの一方的な見方とはいえ、「カルタゴという名は陰鬱な光に照らし出され、今日なお親しみのある連想を呼び起こさない」<sup>17</sup>ようだ。

また、カルタゴは幼児犠牲で有名でもあった。1911年版の『ブリタニカ百科事典』はディオドロスやプリニウスの記述を引いてそれを紹介している。<sup>18</sup> 文学作品ではフローベールの『サランボー』が、赤々と燃えるモロク神の炉に幼い子どもたちがつぎつぎと火にくべられている様子を生々しく描きだした。子どもを焼き殺して生け贄にささげる野蛮なカルタゴ人のイメージは、12世紀以来繰り返し告発されてきた少年を儀式殺人の犠牲にするユダヤ人のイ

メージと重なる。

以上、ジュリアスの指摘をもとにフェニキア人とユダヤ人のつながりをみてきた。ここからフレバスとブライシュタインの関係を考えてみよう。ソソストリス夫人から「溺死したフェニキアの水夫」のカードを渡された時、『荒地』の語り手は “Those are pearls that were his eyes” (l. 48) という詩行を思い出す。これはシェイクスピアの『あらし』（一幕二場）の中の妖精の歌（‘Ariel Song’）の一節だ。妖精はナポリ王子に、父王の亡骸は海底に横たわるものの海の魔法によって不思議な変化を遂げて朽ち果てることはない、と歌って聞かせる。この詩行は語り手にとってフレバスの思い出と連動するものだ。

その妖精の歌を下地にしてエリオットが書いたのが“Dirge”である。2つを並べてみよう：

“Ariel Song”<sup>19</sup>

Full fathom five thy father lies;	お父上ははるか五尋の海底におられる
Of his bones are coral made;	その骨は珊瑚となり
<u>Those are pearls that were his eyes;</u>	その目はあの真珠となった
Nothing of him that doth fade	その身は朽ち果てることなく
But doth suffer a sea-change	貴重で不思議なものへと
Into something rich and strange.	海が変えてゆく
Sea-nymphs hourly ring his knell:	海のニンフたちよ 弔いの鐘を鳴らせ
(下線筆者)	

“Dirge”<sup>20</sup>

Full fathom five your Bleistein lies	五尋の海底にブラインシュタインは横たわる
Under the flatfish and the squids.	ヒラメとイカの下に。
Graves” Disease in a dead jew’s eyes!	蟹がまぶたを食べてしまうと
When the crabs have eat the lids.	死んだユダヤ人の目はバセドー病のよう！
Lower than the wharf rats dive	波止場ネズミが飛び込むよりも下で
Though he suffer a sea-change	海の変化をこうむるけれど
Still expensive rich and strange	依然金持ちで見知らぬもの
That is lace that was his nose	あのひもはかつて彼の鼻だったもの
See upon his back he lies	うつぶせの背中をみよ
(Bones peep through the ragged toes)	(ぼろぼろのつま先から骨がのぞく)

With a stare of dull surprise	鈍い驚きのなまざしで
Flood tide and ebb tide	満ちては寄せる波が
Roll him gently side to side	彼をやさしく左右にゆする
See the lips unfold unfold	ほら唇がひらくひらく
From the teeth, gold in gold	歯から金の金
Lobsters hourly keep close watch	ロブスターどもが一時間ごとに見張る
Hark! now I hear them	ほら！聞こえる かりかりと引っかく音が
scratch scratch scratch	

‘Ariel Song’の方は、フレバスの弔いの歌としてふさわしく見える。『荒地』の語り手は「溺死したフェニキアの水夫」のカードを受け取り、彼の美しい瞳が海の魔法で真珠へと変えられる様を思い浮かべたのである。一方、“Dirge”のユダヤ人ブライシュタインはどうだろうか。この詩でエリオットは「ユダヤ人の死体を腐らせることに喜びを覚え」、「ユダヤ人を貶めて気晴らしをする」ことで幸せを感じている、とジュリアスは断罪する。フレバスとブライシュタインは表裏一体であり、くびきでつながれたペアだと言うのだ。つまりフェニキア人はユダヤ人の修辭的な言い回しで、ブライシュタインが抑圧されてフレバスが残ったのは、「1922年までにエリオットにとって反ユダヤ主義の話題は慎むべきものになった」からだ。21

しかし、一方でフレバスは『荒地』の語り手にとって大切な人物である。数少ない美しい思い出とつながっている。例えば、ヒアシンス園の思い出だ。ヒアシンス園と対応しているとされる第2章の男女の不毛な会話の場面 (ll. 111-138) を思い出してみよう。パウンドはこれを、まるでエリオット夫妻の会話を写真に撮ったようだと評したが、22 その会話の中でエリオットを思わせる男性が思い出すが、“Those are pearls that were his eyes.”である。女性から矢継ぎ早に質問を浴びせられ、彼は追憶の世界へと逃避する。出版時は前半が削除されたが原稿ではこの行は“The hyacinth garden. Those are pearls that were his eyes.”となっており、23 ヒアシンス園の思い出とともに海底に眠るフレバスが思い起こされている。つまり、ヒアシンス園であった人物はフレバスであり、そして彼がもう亡くなっていることを男性は知っているということになる。

この「ヒアシンス・ボーイ説」が出されたのは今から半世紀以上も前の1952年のことである。無名のアメリカ人研究者ジョン・ピーターが『荒地』は従来言われているようなヨーロッパ文化の崩壊をテーマとするものではなく、亡くなった男性の恋人を悼むエレジーであるという試論を発表したのだ。24 この小論に対するエリオットの対応はすばやかだった。関係者から事前に情報を得たエリオットはすぐさま複数の弁護士を通じてその撤回を求めたばかりか、すでに印刷された分の回収までも要求したのである。その後この件は関係者の間では口にするのも忌まわしい話題として闇に葬られた。25

それから25年後の1977年、ピーターの論文を足がかりにこの問題を詳細に検討したジェイ

ムズ E. ミラーは、ピーターの論文に対する学会の完全無視の姿勢を「沈黙の陰謀」と呼んで批判している。<sup>26</sup> しかし近年「今ではエリオット研究者のほとんどが、ヴェルドナルの死が『荒地』の作者であるエリオットに個人的・詩的な危機をもたらしたということをしつこく認めている」<sup>27</sup> というコメントが出るようになるなど、ピーターやミラーの研究は再評価されてきていると言っていいただろう。

「ヒアシンス・ボーイ」のモデルだとされたジャン・ヴェルドナルは、エリオットがソルボンヌ大学に一年間留学していたとき医学生として同じパリの下宿に住んでいたフランス人青年である。第一次大戦に従軍し、トルコのガリポリで1915年に戦死している。<sup>27</sup> エリオットは初期の詩集で3回にわたってヴェルドナルに詩を捧げているが、そのうちの1つ『詩集1909-1925』（1925）の献辞の一部を挙げてみる：

For Jean Verdenal, 1889 – 1915  
mort aux Dardanelles

第一次大戦におけるイギリスの戦いでは西部戦線の塹壕戦ばかりが目立って注目され、「メソポタミアやトルコ、アフリカ、アイルランドで起きたことは見過ごされてきた」<sup>29</sup>とされる。そのためかダーダネルス海峡近くのガリポリで戦死と聞いてもすぐにイメージがわからないが、当時「ガリポリにまつわることすべてが悲劇的な高貴さをかもし出した」<sup>30</sup>といわれるように、ガリポリは拙劣な作戦によって多くの若者の命を無駄にした愚行の象徴だった。

ガリポリ作戦（1915 – 1917）とは英・仏・豪などの連合軍がガリポリ半島に上陸してトルコを攻め、ダーダネルス海峡を経てヨーロッパの積年の夢であるコンスタンチノープルを手に入れようとしたものだったが、作戦は無謀で連合軍、トルコ軍双方に多大な犠牲者をもたらした。連合軍は撤退を余儀なくされた。大敗の責任という形で海軍大臣ウィンストン・チャーチルが解任されている。連日の新聞報道で当時のイギリス国民は「そこ（ガリポリ）で戦っている将軍や提督の名前を一人残らず知っていた」<sup>31</sup>ほどで、次々と死んでゆく自国の若者たちを思う彼らの気持ちは暗澹たるものだっただろう。

ヴェルドナルは1915年4月に出征して1915年5月2日に戦死。エリオットはその喪失を埋めるために何かにすがるかのように同年6月に、3ヶ月ほど前に知り合ったばかりのヴィヴィアン・ヘイウッドとのちに悲惨な結果に終わる結婚をしている。<sup>32</sup> ミラーらがダーダネルスの海に沈んだヴェルドナルと海底に眠るフェニキア人フレバスを重ねたのは無理なこじ付けではないだろう。

エリオット自身が兵隊として戦争に参加していないため、詩に見られる戦争の言及が具体的に論じられることは少なかった。しかし近年その指摘は増えている。“Unreal City”(l. 60)で亡霊のような多数の人影をみた時、語り手がもたらす驚きをこめた悲惨なつぶやき “I had not thought death had undone so many “ (l. 63) は、ダンテが下敷きとはいえ、むしろ

直接にはロイド・ジョージが第一次大戦を振り返って書いた次のような思いと同じだろう。

「各国のけなげな若者が1,200万人も倒れ、2,000万人が不具になるということを当時我々は知っていただろうか？」<sup>33</sup>

これらを踏まえてピーターの言うように “straightforward”<sup>34</sup>に『荒地』の冒頭の11行を読んでみよう。そこには、毎年春になるとうずきだす、それまで忘れていた悲しい記憶と欲望、ライラックの花や楽しかった夏のひとときの思い出が描き出されている：

April is the cruelest month, breeding	四月というのは最も残酷な季節だ
Lilacs out of the dead land, mixing	死んでいた大地から
Memory and desire, stirring	ライラックの花がよみがえる
Dull roots with spring rain.	思い出と欲望がないまぜになって
Winter kept us warm, covering	鈍い根っこさえも春の雨で突き動かされる
Earth in forgetful snow, feeding	冬の間僕らは暖かだった 冬は大地を
A little life with dried tubers.	忘却を誘う雪でおおい ひからびた
Summer suprised us,	地下茎でかすかな命を保っていた。
coming over the Starnbergersee	夏、僕らがすごした
With a shower of rain;	シュタルンベルガー湖
we stopped in the colonnade,	にわか雨には驚かされた
And went out in sunlight,	柱廊で雨宿りをして
into the Hofgarten,	日が差したら外に出た
And drank coffee,	ホーフガルデンに入って
and talked for an hour.	コーヒーを飲み、一時間も話したね。

ここに描かれる二人はただ公園を歩いたり雨宿りしたりコーヒーをのんだり、となにげないことでもそれだけで楽しそうだ。エリオットは、ヴェルドナルと思われる友人の思い出を後年次のように述べている：

私には感傷的な夕暮れの思い出がありますが、ある日夕方近くに、友人がライラックの小枝を振りながらルクセンブルク公園を歩いていたという思い出です。その友人はのちに（わたしの知る限りでは）ガリボリの泥と消えました。<sup>35</sup>

ライラック（むしろリラかもしれないが）は、「ロマンティックだった」とエリオットが回想

するバリ時代の思い出を象徴する花のようだ。<sup>36</sup>

第一次大戦時の男性間の親密さを扱った論文で、ある研究者は“romantic”という言葉の使われ方に対して次のように言っている点は、エリオットのこの回想と関連づけてみると興味深い:「エロティックな要因が曖昧だったり、わからなかったり、意識されない場合の男性同士の親密さを論じる際に『ロマンティックな友情』という表現をすることが多いようだ。」そしてその例としてロバート・グレイブスの芝居から、軍隊内の人間関係を表す言葉として“*They are very, very romantic links*”を挙げている。<sup>37</sup>

さらに、ヴェルドナルへの献辞にエリオットは二度、ダンテからの引用を添えている。『神曲』の「煉獄篇」からのもので、煉獄にいる詩人スターツィオが、生前師であったヴェルギリウスに再会し、喜びに打ち震えながら言うことばである。エリオットはこの再会の場面を後年再びエッセイで取り上げて、特に“*affecting*”な場面の1つであるとしている。<sup>38</sup>「冬が僕らを暖めてくれた」ように、愛の熱は彼を暖めてくれる:

これでわたしがあなたにどれだけ熱い愛情をもっているかわかっていただけだと思います。わたしたちは(煉獄にいる今)空虚な影であるのに、それがまるで現実であるかのように感じるのですから。<sup>39</sup>

マジョリー・パーロフはこの献辞を評して「堅苦しく、遠まわしで、自己防衛的な『荒地』の作者にとって、これは驚くべき愛の宣言だ」と言い切る。<sup>40</sup>

ここでジュリアスの指摘に戻ろう。もし彼が言うようにユダヤ人をあざけるためだけに何かを下敷きにして書きたいのなら、フレバスを連想する“*Ariel Song*”は適切ではないだろう。フレバスがブライシュタインとくびきでつながれなければならない理由はユダヤ人の揶揄以外にあると考えられる。

では『荒地』中にブライシュタインが姿を変えてはいりこんではいないだろうか。スミルナの商人ユージェニデス氏である。ユージェニデス氏はブライトンのメトロポールホテルで週末を過ごそう (“*a weekend at the Metropole*” l. 213) と語り手に同性愛的な誘いをかける人物だ。旅先で相手を物色する無精ひげをやはしたトルコ系らしい同性愛者と、海底に眠る美貌のフェニキアの水夫は、同じ一本の流れに合流するとエリオットは注をつけている:

干し葡萄売りの片目の商人はフェニキアの船乗りに溶け込む。<sup>41</sup>

この注があるにもかかわらず、フレバスとユージェニデス氏はこれまで別々に論じられることが多く、交じり合うことは少なかった。これは見すごされたというよりも、研究者たちが両者を関係付ける作業を意識的に避けてきたからのように思われる。そういった批評家たちの態度をコリー・ラモスはむしろ妨害だとして次のように述べている:

批評家たちはこれまでずっと、スミルナの商人がフェニキアの水夫を汚さないように、その境界線を警備してきたのだ。<sup>42</sup>

しかし、なぜくびきでつながれているのかを見るためには、境界を越えて水面下をのぞく必要があるだろう。ここでフレバスはユダヤ人の醜さではなく、「その名を口にできない愛」である同性愛と結び付けられている。トルコはダータネルスで英仏ら連合軍が戦った相手であり、当時 “unspeakable” (口にするのも嫌なやつ) は「イギリス人ならだれでも知っているトルコ人の蔑称」であった。<sup>43</sup> またイヴ・セジウィックは、イギリス人がトルコ人に対して抱いていたイメージのひとつに同性愛者のイメージがあったとして、トルコ人を「生来の男色人種」と呼ぶ例を挙げている。<sup>44</sup> さらに「怠け者で醜く好色で肌の黒い狂信者」というのが20世紀はじめまでに一般的なイギリス人のトルコ人観になっていたとある歴史家は振り返る。<sup>45</sup> そしてこれは、19世紀後半から20世紀にかけて、ユダヤ人に対して使われた用語と交換可能なほど見分けがたい。T. E. ローレンスが「色欲と自己否定の間をうつろう」セム族の例として挙げている人々は、『荒地』の読者には妙に馴染みのある顔ぶれだ：

ブライトンのメトロポールホテルのユダヤ人、守銭奴、アドーニスの礼拝者<sup>46</sup>

19世紀に再発見されたセム族という他者のカテゴリーは、それ以外の他者たちと容易に結びついてゆく。すなわち同性愛者、性倒錯者、病人、犯罪者、そして女性である。「優生」(well-born) を意味するユージェニデス氏の名前に枕詞のようにについている地名スミルナは女性の名前でもある。オヴィディウスは、スミルナが父親とインセストの罪を犯して、アドニスが生まれる物語をはじめの前に、これは口にするのもおぞましい話だと読者に警告するのだ。<sup>47</sup>

確かにこれらは、ラモスが言うように、エリオットが同性愛を「異端であるとみなしていた」証拠であり、なおかつ「異性愛的な男性性を肯定しようとする決然たる決意のほどを証明している」<sup>48</sup> ことになるだろう。そしてさらに、フレバスの分身である “Dirge” のユダヤ人がその死体すらも冒瀆され、醜いとあざ笑われ、ユージェニデス氏がインセストの罪を犯す名前を付けられた同性愛者に描かれるのは、そしてなによりフレバスが死ななければならないのは、エリオット自らの女性性が罰せられているからではないだろうか。

ヒアシンスは、アポロンに愛された美少年ヒュアキントスの花であり、そもそも、ヒアシンス園に女性の入る隙はない。しかし、エリオットは花園を描く際にヒアシンスを選び、そこに異性愛の粋をはめこもうとした。エリオットによって同性愛の粋の中にむりやり異性愛のファクターが持ち込まれた例はこれだけではない。“The Love Song of St Sebastian” でもヒアシンス園と同じ構図が見られる。エリオットは、19世紀以降同性愛のアイコンとしてずっと使われてきた聖セバスティアヌスを題材にして恋歌を歌っているが、最後にきて女



性（と思われる）の恋人を持ち込む。血がランプのまわりにたまるほどに自らを鞭打つ主人公（I would flog myself until I bled, / And after hour on hour of prayer / And torture and delight / Until my blood should ring the lamp）は、恋人の女性を惨殺し恍惚を得る（And I should love you the more because I had mangled you）。<sup>49</sup>

聖セバスティアヌスとは3～4世紀の人物で、信仰のため矢を全身に射られて殉教した。このモチーフは芸術家たちを刺激したようで、ルネサンス以後、若く美しい男性の裸体を描く口実として好んで取り上げられ、同性愛のアイコンとなった。<sup>50</sup> その中でもマンテーニャの描くセバスティアヌスを見てエリオットはこの詩の着想を得たようだ。マンテーニャのセバスティアヌス像は体中に刺さった矢とそこから流れ出る血、白く上を向いた目が特徴だ。ある批評家はこの絵の中へ「ファロスのな矢を全身に浴びる恍惚の痛みのなかで、美青年が意味するホモエロティックな含み」を指摘している。<sup>51</sup>

しかし、エリオットの“The Love Song of St Sebastian”では矢を浴びて殉教する場面は描かれない。つまり、ファロスで全身を貫かれる恍惚を経験することはないのだ。かわりに彼はその血で罪をあがなうかのように自らを鞭打ち、恋人の女性を殺すのである。自らの内なる女性を殺すのである。同様に、ヒアシンス園の思い出はブライシュタインという醜い姿で罰せられるか、そうでなければ死を迎えなければならなかった。否定され嫌悪されあざけり嘲笑されるのは女性なる自己であり、『荒地』は愛する自己を葬る葬送歌だと言えるかもしれない。最後に、ジュリア・クリステヴァの有名な一節を引用しよう：

おぞましきものがあらわれるのは病気や不潔のある場所ではない。アイデンティティ、システム、秩序をかき乱し、境界や規範を尊重しないもの、つまりどっちつかずでまぎらわしい混ぜ合わせがおぞましきものになるのだ。<sup>52</sup>

#### 注

<sup>1</sup> Glover Smith, *The Waste Land* (London: George Allen & Unwin, 1983), 108; Eleanor Cook, “T. S. Eliot and the Carthaginian Peace,” *T. S. Eliot's The Waste Land*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1986) 90-91; A. David Moody, *Thomas Sterns Eliot: Poet* (Cambridge University Press, 1979) 96; Calvin Bedient, *He Do the Police in Different Voices: The Waste Land and Its Protagonist* (Chicago: The University of Chicago Press, 1986) 160 など。

<sup>2</sup> Anthony Julius, *T. S. Eliot: Anti-Semitism and Literary Form* (Cambridge: Cambridge U.P., 1995) 140.

<sup>3</sup> Sabatino Moscati ed., *The Phoenicians* (1988; New York: Rizzoli, 1999) 8, 17-19.

<sup>4</sup> Leon Poliakov, *The Aryan Myth: A History of Racist and Nationalist Ideas in Europe* (1971; New York: Penguin USA, 1977) 272.

<sup>5</sup> Edward Said, *Orientalism* (1978; New York: Vintage Books, 1979) 102.

<sup>6</sup> H. G. Wells, *A Short History of the World* (1922; Penguin Books, 1936, 2000) 82, quoted in Julius 114.

- <sup>7</sup> Martin Bernal, *Black Athena: The Afroasiatic Roots of Classical Civilization* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1989) 337.
- <sup>8</sup> John Hatcher, *English Tin Production and Trade before 1550* (Oxford : Clarendon Press, 1973) 9-10.
- <sup>9</sup> Herodotus, *Histories* III:115.
- <sup>10</sup> Arthur Conan Doyle, *Sherlock Holmes: The Complete Novels and Stories*, Vol. II (New York: Bantam Books: 1986) 420.
- <sup>11</sup> Patricia Sloane, *T. S. Eliot's Bleistein Poems* (Lanham, Maryland: University Press of America) 60-61.
- <sup>12</sup> T. S. Eliot, *The Complete Poems and Plays* (London: Faber & Faber, 1969) 51. 以下、『荒地』からの引用はすべてこの版を使い、行数のみを記すこととする。
- <sup>13</sup> Cook 164.
- <sup>14</sup> Moscati 640; Gleen E. Markoe, *Phoenicians: People of the Past* (Berkeley, Los Angeles: University of California Press, 2000) 189.
- <sup>15</sup> Moscati 628-653.
- <sup>16</sup> Pliny, *Natural History*, XV. 18:74.
- <sup>17</sup> ゲルハルト・ヘルム,『フェニキア人』(東京:河出書房新社,1976) 289. (Gerhard Herm, *Die Phönizier*, 1975) .
- <sup>18</sup> "Carthage," *Encyclopaedia Britannica*, 1911 ed.
- <sup>19</sup> William Shakespeare, *William Shakespeare: The Complete Works*, ed. Peter Alexander (London: Collins, 1951, 1983) 7.
- <sup>20</sup> Eliot, *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations of Ezra Pound*, ed. Valerie Eliot (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1971) 119, 121. 以下, *A Facsimile* と記す。
- <sup>21</sup> Julius 141.
- <sup>22</sup> *A Facsimile* 126 n. 5.
- <sup>23</sup> *A Facsimile* 19.
- <sup>24</sup> John Peter, "A New Interpretation of 'The Waste Land' (1952)" and "Post Script," *Essays in Criticism* 19 (April 1969): 140-173.
- <sup>25</sup> James E. Miller, *T. S. Eliot's Personal Waste Land: Exorcism of the Demons* (University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1977) 12- 14.
- <sup>26</sup> Miller 13.
- <sup>27</sup> Sander M. Gilman, "'Rats' Alley": The Great War, Modernism, and the (Anti) Pastoral Elegy," *New Literary History* 30 (1999): 193.
- <sup>28</sup> ヴェルドナル関連の伝記的事実は Miller による。
- <sup>29</sup> Paul Fussell, *The Great War and Modern Memory* (Oxford: Oxford U.P., 1975, 1979) ix.
- <sup>30</sup> James Morris, *Farewell the Trumpets: An Imperial Retreat* (New York, 1978) 188, quoted in Gilman 169.
- <sup>31</sup> Alan Morehead, *Gallipoli* (1956; Chatham, Kent: Wordsworth Editions, 1997) 279.
- <sup>32</sup> Carol Seymour-Jones, *Painted Shadow: The Life of Vivienne Eliot* (New York: Doubleday, 2002) 87.
- <sup>33</sup> David Lloyd George, *War Memoirs of David Lloyd George* Vol. 1 (1918; New York: AMS Press, 1982) 105.
- <sup>34</sup> Peter 141.
- <sup>35</sup> Eliot, "A Commentary," *The Criterion* 13 (April 1934) 452.
- <sup>36</sup> Eliot, "The Art of Poetry, I: T. S. Eliot," *Paris Review*, Paris, 21 (Spring/Summer 1959), 56.
- <sup>37</sup> Santanu Das, "'Kiss me, Hardy': Intimacy, Gender, and Gesture in World War I Trench Literature," *Modernism/Modernity*, 9.1 (Jan. 2002) 53.

- <sup>38</sup> Eliot, *Selected Essays* (1932; London: Faber & Faber, 1986) 255.
- <sup>39</sup> Dante, *Purgation*, XXI:133-136. 英訳は Eliot, *Selected Essays* (1932; London: Faber & Faber, 1986) 255.
- <sup>40</sup> Marjorie Perloff, *21st-Century Modernism: The "New" Poetics* (Oxford: Blackwell Publishers, 2002) 34.
- <sup>41</sup> Eliot, *The Complete Poems and Plays*, 78.
- <sup>42</sup> Colleen Lamos, *Deviant Modernism: Sexual and Textual Errancy in T. S. Eliot, James Joyce, and Marcel Proust* (Cambridge: Cambridge U. P., 1998) 114.
- <sup>43</sup> Moorehead 127.
- <sup>44</sup> Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (New York: Columbia U.P., 1985) 187.
- <sup>45</sup> Robert Rhodes James, *Gallipoli* (1965; London: Pan Books, 1984) 4.
- <sup>46</sup> T. E. Lawrence, *Seven Pillars of Wisdom: A Triumph* (1926; Garden City, N. Y. : Doubleday, Doran & Co., 1935) 42 quoted in Said, *Orientalism* 241.
- <sup>47</sup> Ovid, *Metamorphoses*, X.
- <sup>48</sup> Lamos 114.
- <sup>49</sup> Eliot, *Inventions of the March Hare*, ed. Christopher Ricks (1996; New York: Harcourt Brace & Company, 1997) 78.
- <sup>50</sup> Richard A. Kaye, "'A Splendid Readiness for Death': T. S. Eliot, the Homosexual Cult of St. Sebastian, and World War I," *Modernism/Modernity* 6.2 (April 1999) 112-119.
- <sup>51</sup> Harvey Gross, "The Figure of St Sebastian," *The Southern Review*, 21.4 (Autumn 1985) 977.
- <sup>52</sup> Julia Kristeva, *Powers of Horror* (1980; New York: Columbia U.P., 1982) 4.

(もりた よりか 本学非常勤講師)